

ふるさとルネサンスの会会報 (第一号)

三年目の本気

白井啓治

ふるさとルネサンス民話塾を開講したのは平成十五年六月。第一期生として五名の受講生とともにスタートし、途中何名かの受講生を迎えたのであったが、卒業したのは三名、そして現在市民プロとしてルネサンスの会に残って創作活動を続けているのが二名。

たった二名、と言われそのだがとんでもない。指導してきた者の目からすると、第一期生で二名も残れた、という思いが強い。

五月某日、入塾以来ふるさとの歴史を見直し、物語として書き続けている打田昇三さんが百三十枚にのぼる石岡と絹の関係を語る物語を書き上げてきた。非常に面白く、良く書けていた。しかし、物語を読ませるといつエントナーメントの角度から見ると、その仕掛けであるプロット・テイクの弱さがあり、書き直すように突きかえした。

正直なところ少し迷った。文作を職業としているのであれば、迷うことなく突き返すのであるが、市民プロとしてのレベルの人にはたしてここまで要求すべきかどうか迷ったのである。

純粹に作品の評価ということであれば、プ

ロの作家もアマチュアも線引きする必要はないのであるが、趣味として文作を楽しんでいる人と職業として文作をする者との間には読ませるという技術の差は歴然と存在しているし、その技術がなければ職業作家としては成立つものではない。

市民プロというもののレベルを考えたとき、単なる趣味ではなく、かといって職業作家ほどには要求されるレベルは高くないとしたとき、読ませる技術としてのプロット・テイクの話はすべきかどうか大いに迷うところではある。

迷いながら結局、プロット・テイクの話をし、原稿を持ち帰ってもらったのであったが、打田さんの作家を志向する意識の高さ、その意欲に驚嘆させられた。

絵を描いているもつ一人の一期生兼平智恵子さんも同様である。石彫家の鶴見修作氏から痛烈な批評を受けるまでになったのである。通常、作家達は趣味でやっている人達には批評を与えたりしないものである。楽しんでもらえたらそれで十分だからである。

批評を与えるというのは、好評であれ酷評であれ、批評する側にも、自分の作品を創作すると同様に、ある種命がけの覚悟を持って

行わなければならないことなのである。だから、簡単には批評はできないのである。

第一期生のふるさと作家として自己昇華しようとす志向と意識には、指導してきた者には嬉しい驚嘆である。正直なところ市民プロとは言いながらプロット・テイクなどの話ができるとも、するとも思ってもいなかった。

この嬉しい驚きは、創作塾の数ヶ月遅れにスタートした劇団「表現舎しゅわーど」の俳優にもいえる。劇団第二期生の小林幸枝さんは、全く耳が聞こえないというハンディーをもった俳優であるが、一般的にハンディーとされていることを自身の個性としての才能にまで昇華させている。

ふるさと物語の表現として、この石岡にしかないものをと、サイン手話を基軸とした朗読舞・朗読舞劇という新しい演劇スタイルを創出し、その完成を目指しているが、小林さんのもつスケール感には稀有なものである。

今は、演技技術の発展途上であるが、すでに舞台宋えは中央の舞台上へも見劣るものではない。演出家としては、ぞつこん参っている逸材である。このまま伸びていけば朗読舞というスタイルをこえて言葉舞の演技者として新しい演劇のジャンルを築いてくれるのではないかと思っている。

小さくたっていい。本物が一人育てば、十人が繋がって育つ。ふるさと文化の各分野に一人の本物が育ち、巣立つようになってこの三年目こそ、本気の年になるだろうと思つ。

「ふるさと」 山 重幸

ふるさとルネサンスの仲間になって早二年が経ちました。

東京ひばりが丘（西東京市）から小美玉羽刈（美野里町羽刈）に越してきて三十七年になります。この地は私の故郷である福岡（筑紫の国）の環境によく似たところです。小学校時代、正月・春・夏休みに遊び過ごした森や池や田圃の風景がそのまま再現されたかと思われ、落ち着いた感じの良いところです。そんな羽刈の地の、遠州池の北側に家屋敷を建て暮らしを始めたのでした。

友人に隣の土地を世話した折、間の土地を菜園にと求め、家族五人が総出で行った開墾には多くの思い出が耕されて在ります。海上での勤務中は家族任せになりますが、休暇中は手拭をほつ被りに、土地づくり、堆肥づくり、土地の境界林の植え込みと楽しい汗を家族で流しました。

農園の南は遠州池、西は田圃を通して筑波山があり、春は池の周りの桜、夏は青葉、秋は刈り入れ、冬は白鳥と年中花鳥がにぎわう。

今日、六月七日は、術後六ヶ月。

朝5時、太郎（雄犬三歳）と田圃の脇道を散歩しながら語りかけたり、歌を聞かせたりと、太郎の健康、機嫌をさぐりながら私自身の体調も整える。

朝は大抵、太郎との散歩の一時前に起床する。起きたら直ぐにタマ（メス猫 十二歳）

に「お早よう」の挨拶をし、朝食を出してやる。朝食が終わると、外に出して、排便、外気浴をさせる。そして、太郎の散歩。散歩から帰ると太郎に食事を与える。それでようやく私の時間になる。

新聞を読み、ラジオを聴きそしてテレビを見る。その後、買い物、畑と庭の草取り、花木の剪定などが待っている。悠々に見えて、実に忙しい日常である。

新しい石岡市と小美玉市ができた。しかしこれで終わりであつては「ふるさと」は先細る時を少しだけ遅らせたに過ぎないと思う。

次にはかすみがうら市、石岡市、小美玉市の合併を目指すことが、古の人、常世の国といえるは、蓋し疑うらくは、此の地ならむか……と言わしめた「ふるさと常陸の国」をルネサンスすることではないだろうかと思つた。

歴史の中に何を観るかA 打田昇三

ルネサンスの本場では、目的の一つに「古代の再生・栄光のギリシア・ローマ時代を蘇らせて古典の文明の輝きを取り戻す」ことがあつたらしい。戦争に明け暮れたり、猛獣と人間を戦わせたしたりした古代地中海世界に蘇らせるほどの価値があつたかどうかが、異国の庶民としては疑問もあるが、中世ヨーロッパの暗黒社会よりはマシと考えられたのだろう。

メソポタミア・エジプトなどに文化を生んだ古代オリエント社会は、アレキサンダー大王のペルシア征服で終わるとされている。それから六百年以上経って統一王朝らしいものが出来たのが日本であるが、昭和二十年迄は、ギリシアが植民地獲得に地中海へ進出し、ローマが小都市国家として芽生えた頃に日本が誕生したのだと国家が国民に教えていた。

戦争の気配が身近に感じられるようになった昭和十五年五月に、帝国ホテルで「日本・イラン文化協会」が発足した。世界の二大立憲君主国として交流していこうという趣旨である。

当時のイランはペルシア帝国を起源とする王国を自称しており、昭和四十六年には堂々と建国、二千五百年際を世界にアピールした。日本からは三笠宮が出席している。

その後、イランはホメイニ師の革命で王朝を廃止し現在に至っているから、二千五百年祭も夢と消えたが、栄光だけは世界が認識した。

素人が言つと怒られるかもしれないが「歴史」には正史もあれば野史もあり、伝承・故事来歴から昔話も捨て難い。その全てに真実もあり嘘もある。特に日本の歴史は国家権力が一千年近くサバを読み、考古学者が自分で埋めたりしたので国民は呆れている。そういう中で古代を現代に再生するには専門知識や学説に拘らず、滅亡した帝国を持ち出したイランほどでなくても融通性、柔軟性のある理

論や仮説の構築が必要なのではと考えている。神戸市中心にある西求女塚古墳は、三角縁神獸鏡の一括出土と前方後円墳から前方後方分に変更されたことで知られている。

発見や変更の端緒となったのは、歌舞伎の「地震加藤」つまり謹慎中の清正が秀吉の身を案じて伏見城に駆けつける話の京畿大地震で崩れた場所を調査した結果であった。考古学の先生達は、そこに活断層があるらしいと主張したが専門外だったために意見は無視され、一ヶ月後に阪神・淡路大地震が発生した。

「起きてから理論が湧える地震学」

活断層を無視した専門家は痛烈な批判を浴びたらしい。

このところ他所から石岡を訪ねて下さる方が多いと聞く。岐阜の方は「良い町だ」と褒めてくれたし、東京で開かれた教職退職婦人の会の席上で「国府石岡」を熱心に話しておられた方のことを森慶子先生からうかがった。隠れた石岡ファンのためにも、在り来たり
の常陸国府跡紹介ではなく、「さすがに石岡」と言いつて貰えるものを求めて、専門家の鑿鑿を買いながらも何かを探し続けるのが、「地域のルネサンス」だろうと思っている。

歴史の中に何を観るかB 近藤治平

石岡は「歴史の里」を自称し、其れを自慢する声も聞かえてくるが、物語の見えてこ

ない里である。一方、歴史では飯は喰えんという声も聞かれる。

不思議なところだと思っているときに、こんな内容の文章を目にした。何時の発行のものかはわからないが、石岡に書かれたものである。定かには覚えていないが、「今は何でも民話というが、もとも民話という言葉はなく、何でもかんでも民話というのは民俗学を学んできたものにとつては違和感を覚える」というようなことが書かれてあった。

確かに民話という言葉は、明治になって英語のフォーク・テールが訳されて、市民権を得た言葉ではあるが、神話であれ伝説であれ、民衆の口に語り伝えられてきた話であれば、民話というほうが適当している。だから、市民権が得られたのだといえる。

日本の多くの伝統芸術は確立された一つの様式に基づいて長く守られてきたのであるが、実際には今もなお進化を続けているのだ。能にしろ歌舞伎にしろ、また陶芸にしろ伝統を守るといつこの大前提は因習を打ち破ることであり、そのことによつてより確かなものとして、進化しながら継がれてきるのである。だから伝承といつのである。

さて、歴史といつのはそもそも厝を記録するといつものだから、事実を正確に情報として記録し残すといつことである。

定かな記録もなく、曖昧な過去に遡つて、ある事実を正確に知ることの意義とは、年月にそれがあつたと確定することに

ではない。事実を確定することは非常に重要なことである。しかし、もっと重要なのは事実の先にある真実を観ることにある。真実を観るためには、確かな事実を知ることが必要なのである。真実を観るために、確かな事実として記録されるから「歴史」だといつことができる。

真実とは、ある結果としての事象（事実）を導くにいたらしめたプロセスに在るドラマと言つことができる。ドラマとはいつまでもなく物語のことである。物語とは、限られた紙面だから一気に飛躍するが、人間の欲求の充足を希求する葛藤としての希望である。

歴史の意義が未来への希望の物語とすれば、歴史の里を自称するならばそこにもつと物語の声が聞こえてこなければならぬだろうと思つ。

古里とは、十世にわたつて口に伝えられるものの在る里である、とこじつけのような説明があるが、これはあながちこじつけの詭弁とはいえない。口に伝えられるものとは物語であり、物語とは未来への希望なのだから。

石岡にも昨日、物語が口に伝えられたから今日があるのだ。いわば歴史に飯を喰わせてもらっているのである。歴史では飯を喰えないと思つているあなた、歴史を食いつぶすだけで明日に口伝える物語を創造していかないと、ただの穀潰しになってしまいます。

ふるさとルネサンスがスタートして間もな

鈴が池物語を書き下ろし、劇団しゅわーどで演じられました。その時、演出家が俳優さんにこんな話をされました。

『鈴が池物語は、今では忘れ去られようとしている石岡に伝えられてきた伝説としての事実です。伝説にある物語が事実ということではありません。しかし、左近太夫浄幹の智謀の拙さで滅びたこと、そしてその原因は浄幹およびその取り巻きが、先代達が築いてきたものに胡坐をかいて将来のことを考えようとしなかったことによるのは事実です。この事実をもとに後の世の人達が、一つの成功に胡坐をかいていたのでは滅亡するぞ、という教訓として哀しい恨み物語を創作し、伝え残したのかも知れません』と。

記録され、検証された歴史とは一つの事実ですが、私達は、その歴史という事実の先にある真実としての物語を確りと観ることが大切であろうと思います。そして、物語とは生きる、暮らすということの葛藤であり、未来への希望であるといえます。

歴史の中に何を観るかと考えたとき、明日の希望の物語の紡げと断言してもいいのではないだろうか。

歴史の里いしおか

兼平智恵子

石岡の地に来て十二年。美しい風景と豊かな水陸の宝庫として、一万年以上前から人が

住み常陸の国の中心として栄えてきた石岡。先人の懸命に生きた証に触れ、心熱く、いとおしく感じます。この思いを絵手紙に託しておつたえいたします。皆様にも先人の息吹を感じて頂けましたら、とても幸せに存じます。これからも折に触れ描き続けて行きたいと思っております。

平成十五年霜月 夢市場2Fギャラリー

「歴史の里いしおか展」より
それから月日が三年流れました。

昭和四年三月十四日午後七時半、大火に見舞われた石岡は、翌年の復興で歩道とガス灯型街路灯のある洒落た洋風看板建築の軒を並べる銀座のようなモダンな街並みに一新されたそうです。

そのモダンな街並みが戻ってきたかのようなレトロな雰囲気にも包まれている現在の中町通り。優しい人が待つてくれている、どこかほっとする街。そんな中で歴史復興に懸命な皆さんと活動を共にさせて頂いていることに喜びと感謝を噛み締めています。

ぬくもりを与えてくれる人がいる
あたたかい言葉をくれる人がいる
あたたかく抱きしめてくれる人がいる

この街が心のよりどころとなることを切望しています。注目の団塊世代の皆さん、レトロと熱いコーヒートと歴史談義、一緒に頂いてみませんか。

平成十八年水無月

私を応援して！

小林幸枝

表現舎しゅわーどに入団して一年になりました。振り返れば、ずいぶん早い一年でした。

最初の舞台は、サイン（手話）朗読、二ヶ月ほど過ぎたところで、演出家から朗読舞をやってみませんか、と言われた。これまで聞いた事のない舞台表現だった。

それもそのはず、演出家が石岡のために考えた、サイン演技をベースにした新しい舞台表現で、朗読に舞い劇をプラスしたものでした。

詩文の朗読原稿をサイン演技に組み立て、それを舞として表現するのです、と言われ、即興に舞ってみたら、とても気持ちよく、これは私のための表現だと思いました。

横の動きだけではダメ、縦の動きも、舞台を扇形につかって、と毎月新しい台本を渡されるたび、指導も厳しくなります。でも朗読舞が大好き。勿論、朗読舞劇も好き。

初めて演じた朗読舞劇の「新鈴が池物語」は、今は私の十八番。

六月の公演では、「一人は一人、そして二人は一人」という演劇史上初めてではないかと思つ二人芝居に挑戦します。

ふるさとルネサンスは、市民プロの集団です。でも私は、県民プロから、メジャーのプロへと目標を高く掲げてます。
幸枝の朗読舞、応援して！

電動自転車

鈴木真紀子

片道約8キロの道を毎日自転車で通つことになったとき夫が「電動自転車にした方がいいよ。行くときはともかく帰りは体力がなくなっているんだから、ペダルが軽い方が絶対いいよ」と言ってくれたので、出勤の前日電動自転車を買いました。

最初にペダルを踏んだとき「あつこの感覚は！」と身体が思い出した。

そう、自転車を習いたての頃、後ろで大人が押してくれた、あの感覚だったのです。身体の記憶は一瞬にしてその時の情景と心象の風景を蘇らせてくれます。

木造の小学校の校庭、大人用の黒い自転車、優しい兄の声と笑顔、そして夕焼け…。

後ろの大人の手を100%信頼して、子どもはペダルにさえつまく足のとどかない自転車にまたがります。ずっと大人の手を感じて安心してペダルを思い切り踏みます。ペダルがその勢いで上に回ってくるように。

子どもは必ずいます。

「絶対に手を離さないでよ！」

その時はまだ、どんな感覚になつたら自分が自転車を一人でこげるようになるか、わかつていないのです。だから後ろについてくれる大人は絶対に信頼できる人に限ります。でも、いつかその約束は両者の暗黙の了解と歓喜のもとに反故にされます。

補助輪も地面に足のつく子ども用の自転車

もない頃、大人の自転車に乗れることは成長の通過儀礼のひとつのようでした。美しい筑波山や神事のような田植えの様子

を見ながら、三村城跡の発掘現場までの自転車通勤は、新しい記憶となってまた体に保存されました。

劇団「表現舎しゅわーど」6月アトリエ公演

第四期研究生卒業公演

6月25日(日曜日)

第一部 第四期生鈴木真紀子卒業公演 朗読「霞ヶ浦の紅い鯨」

第二部 山重幸 朗読「花夢通り」

小林幸枝・しらみひろぢ 二人芝居「古里は春の夢」

(演出：白井啓治 篠笛演奏：李英哲 舞台背景画：兼平智恵子)

一回目午後2時開演 二回目午後5時開演

前売券 1,300円 ペア前売券 2,400円

詳しくは下記にお問い合わせください

〒315-0014 石岡市国府3-4-21
カフェ・キーボー ふるさとルネサンス
電話 0299-23-1100

今月のふるさとルネサンス

絵と二行文教室

六月二日(金) 午後一時半～三時

六月二六日(金) 午後一時半～三時

日々の暮らしの中に小さいけれど心を喜ばせてくれた出来事、発見を自由律に一行の文に紡ぎ、色に染めて、自分を褒める。時には、思つ人に褒めた自分を葉書に刷いてお裾分けする。暖かく楽しい教室です。

朗読サイン舞教室

六月九日(金) 午後七時半～八時四五分

六月三日(金) 午後七時半～八時四五分

ふるさとの風に吹かれて一行に呟いた詩を石岡雛子をベースにした篠笛の調べに乗って口ずさみながら、サイン手話をもとにして組み立てた舞に舞つ、心癒される教室です。無料体験随時受け付けております。一度体験してみませんか。

劇団「表現舎しゅわど」アトリエ公演

六月二十五日(日)

一回目午後二時開演 二回目午後五時開演
今回は、船塚山古墳を題材にした作品一本と創作童話の公演です。

第四期生卒業公演として鈴木真紀子が「霞ヶ浦の紅い鯨」を朗読。その祝辞にかえて第一期生の山重幸が「花夢通り」を朗読。小林幸枝がしらぬひろちと初の二人芝居「古里は春の夢」に挑戦。朗読舞劇とはまた違った魅力をみせてくれます。
前売券1300円、前売ペア券2400円
カフェ・キーボー、しばのや酒店にて発売。

(お知らせ)

劇団「表現舎しゅわど」では、朗読を演技手話に通訳する人を養成する教室を開くこととなりました。朗読にあわせての演技手話通訳をやってみたい人を募集しております。手話の経験・未経験は問いません。サイン舞俳優の小林幸枝が直接指導します。詳しくはカフェ・キーボー・表現舎しゅわど(〇二九九 一三一 一〇〇)までお問い合わせください。
また劇団では、研究生を随時募集しております。興味をお持ちの方、連絡をお待ちしています。

七月十日(月)～七月二十一日まで、水戸のNHK「ワイワイギャラリー」で「ふるさとルネサンスの会の作品展」が開かれます。期間中、小林幸枝の朗読舞も披露されます。お時間のある方ぜひご覧下さい。

昭和4年の大火の後、昭和5年に建てられた洋風看板建築のそのままに保存された中に、香り高い自家焙煎コーヒーの声を聞きながら、ふるさと物語を感じてみませんか。

「みわたせば思い思いにふるさとの風」

カフェ・キーボー店主

編集後記

春の物憂い陽気の殆どないうちに、早々と梅雨模様の毎日。おかげで悪質な風邪が流行っているようです。毎月、会員の小さな文による活動記を発行していくことになりました。ご意見、ご感想がありましたらお聞かせください。

編集事務局

〒315 0001

石岡市石岡13979 2

0299 24 2063

(白井発信方)